部品検査 DXで効率化

富士通フロンテック

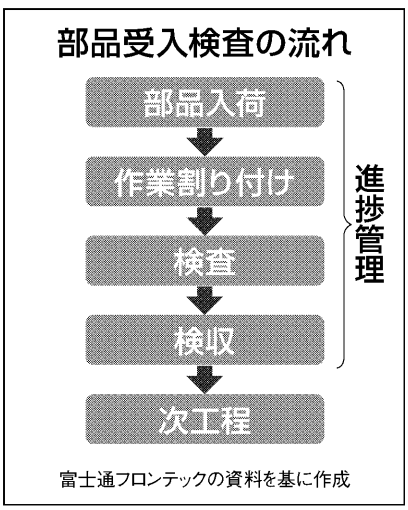
フィリピン子会社に導入

富士通フロンテック（東京都稲城市、渡部広史社長）は、フィリピンの子会社に部品検査を効率化するシステムを6月までに導入する。現金自動預払機（ATM）関連の新機種開発などで部品点数が増える中、工場のデジタル変革（DX）推進で検査工程の負荷を削減する。同システムを導入済みの新潟工場（新潟県燕市）では2021年度の検査効率を18年度比で約30%改善した。フィリピンでも展開し、さらなる業務効率化につなげる。

フィリピン子会社のフジツー・ダイーテック・コーポレーション・オブ・ザ・フィリピン（FDTP、ラグナ州）で、部品の受入検査業務を自動的に担当者に割り付けるシステムと、検査業務の進捗（しんちょく）を把握するシステムを導入する。

業務割付システムは、製造の組み立て順や部品が必要な時期などの情報を集約して割り付け条件を明確にし、自動化する。サプライヤーから部品が作業工程に関係なくバラバラに納入される中、システムの導入による情報整理に加え、各担当者の検査スキルの違いも考慮して割り当てる。

属人的な業務は個々人への負荷が大きく、割り付け方法も曖昧になりやすい。ミスなどが起こる可能性も高いことから、自動化による業務効率化を見込む。



富士通フロンテックの資料を基に作成

検査業務の進捗管理を見える化するシステムは、部門間で検査情報を即時に把握可能になり、問い合わせなどの対応時間の削減が見込める。

これら二つのシステム以外に、部品の品質データをデジタル化して有効活用する検査システムは、新潟工場とフィリピンで導入済み。

FDTPはATMに搭載する紙幣リサイクルユニットなどを生産する海外の主要拠点。従業員は22年3月末時点で約2300人。

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社